



環境部 環境事業センター

技能労務員 折田 公平

【派遣先】

石巻市立 山下小学校

被災地視察



日和山より被災地沿岸部の様子



日和山より被災地沿岸部の様子



日和山より被災地沿岸部の様子

日和山公園から見た景色は凄惨そのものでした。茅ヶ崎市の馬入橋とさほど変わらない高さであろう橋の上を津波が越えてきたそうです。見渡す限り、波にさらわれてしまっていました。その後、実際に現場に立つと、異臭が鼻をつきました。遠く海岸の方にがれきの山がそびえ立っているのが見え、「初めからあれぐらいの堤防があれば、被害はもっと少なかったかも」と考えてしまいました。女川町へも行きましたが、正直なところ、「いったいこれからどうするのだろう」と呆然とする事しかできませんでした。



女川町の被災状況



女川町の被災状況



女川町の被災状況

防虫ネットの設置

当時はハエが大発生しており、漁港周辺では白い車が黒い車に見える程だと聞いていました。派遣先の山下小学校は高台にあるのですが、それでも校内には大量のハエが入り込み、その対応に悩まされていました。ハエ取り紙の設置や現地の臨時職員の方が作ってくださったペットボトル式のハエ取り器の設置も効果はありましたが、それ以上にハエが多い状態でした。一番の原因は夏期の為、共同トイレの窓を一日中開放していたためで、我々はその間に防虫ネットの設置を行いました。校舎の壁はザラついていて、防虫ネットを取り付ける唯一の道具であるガムテープがなかなかうまく貼り付かず苦労しましたが、相当の効果が得られ、避難者の方から感謝の言葉をいただくことができました。



避難所の様子



学校の黒板を使って連絡事項



多くの備品が届きました

プール掃除

ある日教頭先生から、「土曜日にプール掃除があるが、避難者の方々にも協力願えるか声掛けしていただけますか？」とのお言葉を頂きました。張り詰めた避難所生活の気晴らしになるのでは？という、教頭先生のご厚意でした。例年は生徒達と一緒にやるのですが、今年は放射能の影響を考慮し、先生方とPTAの大人たちだけでやるということでした。当日になると、避難者のほとんどの方が協力しに集まってくださったことに感激しました。普段いろいろと問題を起こすという事で要注意視されていたA班の方々が率先して一生懸命掃除をしていました。一方で普段はじっと我慢しているような方も笑顔を見せていました。その日は本当に暑く、とても大変な作業でしたが、みなのがちが一つになったような気がして、感動を覚えた一日でした。

派遣を振り返って

様々な想いを込めて、「行って良かった」と心から思います。至らなかった部分や、失敗したところは苦い思い出として残っていますが、次は同じミスをしたくないと強く思います。そして、まだまだ継続的な支援が必要だと思います。私のたった1週間の避難所生活ですら、疲れ、普通の生活が恋しくなりましたが、被災者の方々は、何ヶ月もの避難所生活の後、今もまだ元の生活には戻れないのでしょ。私達はやはり何かしないとイケないと思います。茅ヶ崎市から今回派遣されたのはたったの104人(24年1月末現在)だと聞いています。現地に行かなくてもできる事があるのではないか？もっと議論し、精査し、何か行動する事が必要と考えます。



経済部 産業振興課

主事 半田 雄大

【派遣先】

石巻市立 青葉中学校

石巻市の復興を担うのは、石巻市民

神奈川県及び県内市町村の職員はあくまで石巻市の臨時職員を後方支援するために各避難所へ派遣されています。しかし、私が派遣された避難所では両者の立場が逆転し、派遣された職員の指示のもと、市臨時職員が働いている状況でした。

復興を担うのは石巻市民自身です。一週間程度しか石巻市に滞在しない派遣職員よりも、地域の事情をよく知る市臨時職員が避難者対応の良し悪しを判断しながら避難所を運営していくことが、もとのまちの姿を取り戻すことには有効だと考えていたからです。そのため、市臨時職員とは積極的にコミュニケーションを取り、彼らが避難所運営を主導できるように仕事を割り振っていきました。

避難している子どもたちとのコミュニケーション

現地にいる神奈川県職員との派遣前の事前調整にて、震災の凄まじい光景（津波に流される家屋、人等）を目の当たりにしている子どもたちと積極的にコミュニケーションを取って欲しいと伝えられていたので、この点については意識して取り組みました。

しかし、実際に避難所で子どもたちに接してみると、わたし自身の心配には反し、震災から4ヶ月もの間、避難所で生活してきた子どもたちは非常に逞しく感じました。想像しえない事態が起こり、心理状態も大きくかき乱されたであろうにも拘らず、今は子どもたち自身が自分の体験をわれわれ派遣職員にも面と向かって話せるようになっており、彼ら自身の成長と、復興への明るい兆しを感じることができました。



ボランティアによる流しそうめん体験



大人も自然と笑顔に

震災前の学校を取り戻すために

市立中学校の避難所に派遣されることになってからというもの、個人としてはいかに早く震災前の学校の姿を取り戻すかを考えていました。その点でまず取り組んだのが、大量に持ち込まれた物資の整理です。物資の倉庫となっている教室を整理し、物資を集約させて、教室を学校に返していく。こうした地道な取り組みによって、学校機能の復旧を図っていきました。



支援物資で埋め尽くされた教室を1週間掛けて整理しました

避難所内の健康管理について



米軍から提供された温浴設備を自衛隊が運営

私が派遣された7月は、東北地方でも日中は気温が高く、汗ばむほどでした。避難所の一部として使用していた体育館は換気が非常に悪く、室温が高かったため、避難者の健康状態がとても懸念されていました。

そのため、市臨時職員を通して市に申し入れを行い、扇風機の設置時期を早めてもらい、避難者の声を聞きながら、より換気ができるようにしました。

派遣を振り返って

市職員だけでなく、市に関わるすべての人がこの東日本大震災の教訓を生かし、災害に対する意識を高め、できることを「実行」しなければならぬと感じました。

避難所での業務中、とある避難者から「役所の人間も被災者だし、文句ばかり言っても憂さ晴らしにしかならない。優劣はつけられないし、できることも限られている。だから、まずは自分たちができることを、周りの人と協力しながらやるしかないって気持ちだった。」と話していました。災害が発生すれば、市職員だけでは解決し得ないことばかりが起こることは言うまでもありません。だからこそ、各家庭が最低3日分の食事を準備するなど、“自主的な取り組み”を広く、継続的に訴えていきたいと思いました。



財務部 収納課

主任 白井 研

【派遣先】

石巻市 蛇田公民館

震災後4ヶ月間の公民館勤務職員の勤務



避難所である石巻市蛇田公民館



循環入浴車

私の派遣先は蛇田公民館で8日間避難所に寝泊まりし避難所運営支援を行いました。蛇田地区は津波の被害はなく公民館の付近には大型ショッピングセンターが通常営業しており、一見すると被災地ではないような場所でした。公民館には常勤の石巻市職員が3人おりました。その3人は震災後交代で当直勤務をしていました。その内1人は心労により精神状態が不安定になることがあり当直勤務からは外れていましたので、実質2人の職員が交代で当直勤務をしている状態でした。避難所運営支援派遣職員は2人体制で入っていましたが、石巻市の職員の方が当直勤務を辞めることはありませんでした。日中の雑務においてはほとんどの業務を派遣職員で行っており多少負担軽減にはなりましたが、現地職員の負担はかなり大きいものだと感じました。



仮設風呂のテントの中

避難所での人間関係

避難所運営については、各々の避難所によって形態が異なりうまくいっているところとそうでないところがあったと思いますが、比較を行うことはできません。しかし、私の目から見た蛇田公民館は避難所として理想的な状態にあったと思います。その理由としては常勤の職員がいたことが大きな要因だと思います。震災直後から同じ職員が避難所運営をし続けたことにより、避難所運営にブレがなく、不公平感がなかったこと。避難者と人間関係を構築し不満などのほけ口となったことにより避難者同士の争いが少なく済んだことがあげられると思いました。また、避難所運営支援は8日間の短期派遣では、避難者との人間関係構築は困難だと感じました。



避難所内の通路



支援派遣職員の寝室



避難所の状況

派遣を振り返って

被災者の方と実際に関わることに大きな不安を抱いて現地へ向かいました。避難所の運営自体は震災後4ヶ月経過していることもあり安定していました。しかし、現地職員は当直勤務をされており自身も被災しているにも関わらずかなり大きな負担を負っていると感じました。避難所運営においては、避難者と運営する側の人間関係が非常に重要だと感じ、職員の負担は大きくなりますが、避難所運営職員を予め決めておくことが重要だと思いました。また、市の職員は災害が起きた時などの非常時には、大きな役割を担うことになるということを改めて感じました。



環境部 環境事業センター
技能労務副主査 井上 雄介

【派遣先】

石巻市立 蛇田中学校

自分で何とかしなければ



たくさんの支援物資

派遣当初は十分な引き継ぎもなく、避難所内での支援物資の置き場所を把握するのにとても苦労しました。臨時職員も把握しておらず、ひとつひとつ確認をしていきましたが、その際に前任者たちが作ってくれた置き場所の地図が大変役に立ちました。そして私は自分ができることを考え、在庫を整理し要求頻度の高い物資を入り口の近くに移動し効率的に業務を進められるようにするなどの工夫を行いました。



調味料はご自由に



無料電話



感染予防



掃除も大切な仕事



支援職員の寝床



避難所の様子

できることを頼もうよ

私が着任したのは8月で、ちょうど夏の暑い時期でした。避難所となっている体育館には扇風機しかなく、体育館全体に均等に風を行きわたらせ、避難者のみなさんに涼んでもらうことは至難のことでした。そんな折、申し訳なく思っているところ、避難者の方が「無理な要求じゃなくできることを頼もうよ」と言ってくれたのが嬉しかったです。



復興へ向けてがれき処理が進む



女川町の被災状況



女川町役場の様子



日和山より市内沿岸部を望む

派遣を振り返って

私が被災地支援に向かった時は、被災から5ヶ月になろうとしている頃でした。避難所ではある程度の生活水準が維持されており、みなさんは日々の生活に追われていました。誰も泣いている人はおらず、避難所もショッピングセンターに隣接しており、ここが本当に被災地かと思われました。しかし、みなさんと一緒に生活していくうちに、自分の考えの甘さに気付かされました。私の派遣された避難所が被災していない所にあるだけであり、また避難所である限り生活できる環境を提供していかなければなりません。さらに、誰も泣いていないのではなく、泣き過ぎて涙も出ないのだと・・・当初は聞くことをためらっていましたが、打ち解けてきたので恐る恐る被災の日のことを臨時職員の方に聞いてみました。その方は「5人で車で逃げ、車から脱出する際にまず2人いなくなり、自分は電柱にしがみついた。その後電柱から近くのビルに救出された。残りの2人は近くの民家の屋根にいた。1人はロープで救出できたが、もう1人は引き潮に流された。俺は運がいいね。」と笑って語ってくれました。ここまでの心境になるまでが、大変だったろうなと感じました。



経済部 産業振興課

副主査 杉本 裕哉

【派遣先】

石巻市立 蛇田小学校



風通しの悪い体育館



冷却用の水を作っています

暑さ対策

避難所となっている小学校の体育館は作りが古く、風の通りが極端に悪い構造であり、避難所の中にいるだけで体力を奪われる環境でした。

避難所のなかには冷蔵冷凍庫が3台設置されていますが、避難者それぞれが飲み物や漬け物などを入れるため、容量が圧倒的に不足しており、氷を入れた発泡スチロールの箱を設置し、冷蔵庫代わりに使用していました。

幸い派遣期間中には、脱水症状や食中毒などの問題は発生しませんでした。環境面での大きな課題だと感じました。

冷房の効いたリフレッシュルームが設置され、避難者の方の食事は、そこで受け渡しされるシステムになっていました。

毎食、1割程度の食料は消費されずに廃棄することになり、無駄を出さずに必要量を調整するのは難しいと感じました。

臨時職員の方に聞いた話ですが、石巻市の配給食料にかかる費用は1日1千万円とのことでした。



リフレッシュルーム（食材保管庫）



避難所の食事



在宅避難 5人世帯の1日分の食事



共用の生活用具

避難者間のトラブル

避難所の運営は、避難者による自治が確立されていましたが、それでもトイレ清掃やゴミ出し方法などに対する考え方の違いが、避難者同士のトラブルの種になっていました。避難所ではあっても生活環境を良くしようという考え方と、あくまで避難所であり快適さは求めないという考え方があり、双方が納得するバランスをとるのが課題でした。一定程度の期間が経過した安定状態にあっては、どこの避難所でも抱える問題だと思いました。

派遣を振り返って 被災から約5ヶ月の期間が経過しており、避難所としての生活も安定したものとなっていました。避難所の運営は基本的には避難者自身で行っていくという考え方のもと、スタッフはあくまで裏方に徹し、あまり手を出さないというスタンスが取られていました。そんななかであって、「少しでも快適に過ごしてもらおう」、「何かできることを探して実行しよう」という思いを持って避難所に行ったものの、実際には、食事の管理、避難所の戸締まり程度のことしかできることがなく、悶々とした思いを持ち続けたまま過ごした1週間でした。本当に必要な派遣であったのか、少しは避難者の役に立てたのか、最後までわからないまま、何もできずに終わったというのが正直な感想です。

必要以上のサービスを行うと自治自立を阻害する事に繋がるという懸念や、全ての要求に応えることは不可能だから最初から要求に応える前例を作らないという考え方は、我々の日常業務においても陥りやすい考え方であり、避難所運営の難しさと共通するものがあるように思います。今後は被災地での経験を踏まえて、住民自治や持続可能な行政の考え方を大事にしながらも、何事にも全力を尽くすという姿勢を通して市民から支持される職員のあり方を模索していきたいと思います。



議会事務局

主任 横山 淳

【派遣先】

石巻市立 万石浦中学校

大震災後、5ヶ月が経過する避難所では



扇風機とハエ取りリボンが必須



猛暑はリフレッシュルームで対処



掃除は班ごとに当番制で



近隣避難所にできたシャワールーム

私の派遣された避難所では、比較的安定した運営がなされており、避難者自身が自分の時間を有効に活用して自立した生活をしていました。そんなある日、避難所内で大げんかが始まってしまいました。私たち職員も仲介に入り、話し合いの末、その場はなんとか収まりましたが、本当にささいなことが積み重なった結果でした。そんな事態でも、みなさんが分かっていること。それは、「ひとつ屋根の下」で暮らしているということです。震災当初、同じ学校の敷地内でも、教室や柔剣道場など避難所内の様々な場所で別々に暮らしていた人たちが、最終的に全員が体育館の中で一緒に生活しているのです。5ヶ月が過ぎた頃には、避難所の閉鎖の話が出てきており、仮設住宅の建設が急ピッチで進められ、毎日のように抽選が行われていました。最後まで体育館にいるかもしれないという緊張状態で、みなそれぞれの生活をしてきたのが、震災から5ヶ月たった避難所の状況でした。



空きスペースができた避難所

8月12日午前3時22分、震度4の地震が

震災から5ヶ月が過ぎた日の夜。就寝前には、今日で震災から5ヶ月になるねと、避難者の方たちに地震や津波による被害などを話していただいた矢先のことでした。就寝中に大きな揺れ。私たち職員も揺れと同時に起き、津波警報の有無を確認するために部屋を出ました。すると、すでに避難者の方たちはテレビの前に立っており、津波の心配がないとわかると、みなさん就寝につきました。あのときの避難者の方たちの行動から、地震、そして津波の恐怖が伝わり、胸が詰まりました。



地震による避難所の傷跡



津波の被害によるがれきの山



避難所周辺ではがれき御輿で復興祈願



避難所周辺はまだ震災の傷跡が

能動的な業務、積極的な関わり合い



一緒に働いた県職員と臨時職員の方々



体育館全面に付けたハエ取りリボン



避難者に見せてもらったカキの幼生



避難者と行った原発近くの女川町

職員のあるべき姿。それは避難者と積極的に関わり、常に避難者のために動いてくれる職員。当たり前のことですが、臨時職員や避難者の方の話によると違う職員もいたようで、こういう職員がいることに憤りを感じ、避難者の方たちのほうが気を遣っていたようです。同じ空間で生活、支援する者なら、その人の立場に立ち理解者になるべきだと思います。茅ヶ崎市職員は日頃より市民の良き理解者として業務に当たっていると信じています。

派遣を振り返って

被災地支援を行い、目で見て肌で感じ、身体全体で震災の状況を知ることができました。津波、地震、寒さ等様々なものが重なり、大惨事となった東日本大震災でしたが、発見できたことも多くあったと思います。その気づきを今後いつ来るかも分からない大震災に向け、私たち職員だけでなく多くの方たちで見直し、変えていかなければいけないと思います。そのひとつが絆だと思います。今まであった関係を見直し、つながりを大切にする。これこそが今すぐにできる、また、すべき事柄ではないかと思えます。最後になりますが、この被災地支援に御協力・御尽力いただいた多くの方、そして今なお被災地で復興・再建に向けて頑張っておられるすべての方に敬意を表します。



市民安全部 安全対策課

担当主査 樋口 剛

【派遣先】

石巻市立 釜小学校

余った食料や物資をどうするか



避難所体育館受付にある、山積みの物資

災害当初から3ヶ月が過ぎた頃からは、しっかりと食料の配給サイクルは確立され、缶詰やカップ麺などはだぶついてきていました。そのため、山積みになっていた物資はその後のどうなったのか気にかかります。物資の管理方法については、一定の基準（個別管理か集中管理等）を設ける必要があると考えます。

避難所生活は長期化しないよう

発災から5ヶ月が経過。それまで班長を務めていた方は、徐々に仮設住宅棟に移り住み、残っている人では、避難所を自立的に運営していくことが難しい状況でした。よって、何か問題が発生した場合には、対応が難しく、このような事態を防ぐためには、そもそも避難所生活を長期化しないようにすることを考えておく必要があると思います。



ダニバスターズによる清掃

避難所の市の関わり方

避難所の運営は、石巻市の臨時職員が主体となって行われていました。しかし、その臨時職員も別の避難所から通勤している被災者であり、今後の生活に不安を抱えながらの業務となっていました。避難所では石巻市のサポート体制が見えず、応援できていた私としても、トラブル時の対応に不安を感じました。



臨時職員のメンバー

避難者の声

その人は、家族全員が無事でした。しかし、子どもの思い出の品や写真などが全て流されてしまい、悲しんでいました。普段の生活からはそんな感じはしませんでした。やはり夜とかになると寂しさが増すようでした。震災で今までの当たり前の生活を、一瞬にして失った人に対して、どのようなケアが必要なのか、どこまで行政で対応するのか、どこからはNPOなどの支援を必要とするのかを考えておく必要性を感じました。私は、ダニバスターズの清掃を行ってくれた、ピースボートのような団体と平時より連携をとり、いざというときに備えるべきだと考えます。



被災地の様子

派遣を振り返って 東日本大震災の特徴は、広範囲で津波の被害が発生したことです。また、多くの市職員が被災し、庁舎の機能が停止・低下したなかでの業務遂行が課せられるなど、防災計画をはじめとして、業務に対し大きな見直しを求められることになりました。その中でも特に、災害時の行政組織を見直す必要があるのではないのでしょうか。調整から命令に対応が変化し、職員も一致団結して困難に対応できる体制が必要ではないかと思います。また、行政で対応仕切れない事案については、ボランティアの力を借りながら業務を進めていく必要があるのではないのでしょうか。そのためには、日頃から関係者との人間関係も含めた防災対策の必要性を、避難所でのボランティアの活動を見ながら感じました。最後に、職員やその家族が被災した際に、どこまで「私」の部分犠牲にし、「公」に尽くすことができるのか、非常時の精神的に難しい中で対応ができるのかもじっくり考えておく必要があると思います。



環境部 環境事業センター
技能労務副主査 国分 浩一

【派遣先】

石巻市立 蛇田中学校

派遣初日の大仕事

派遣初日の夜、配食が終わり20時頃からビンゴ大会がありました。派遣初日の職員が司会をすることになっており、とても緊張しました。しかし、避難者のみなさんは楽しみにしているようで会場にはたくさんの方が集まりました。避難生活の中であって、このような避難者の方に喜んでもらえるようなことができて良かったです。



避難所の食事



全国から多くの備品が届いています

派遣初日の大仕事

派遣当日は避難所の掃除の日でした。その日はダニバスターという避難者の布団・毛布などの洗濯・乾燥を行う専門の業者が来てくれる日でした。しかし、自分の物を移動されるのが嫌な人やその日に不在な人がいてなかなか決まりませんでした。



避難所の様子



ご自由にお読みください



悩む避難所職員・・・

震度5弱の地震が起きる

派遣期間の中頃、震度5弱の地震が起きました。しかし、避難所のみなさんは落ち着いていて、私の方がびっくりしてしまいました。



視察に行きました



女川町の被災状況



火事も発生



がれきの山

最終日のエピソード

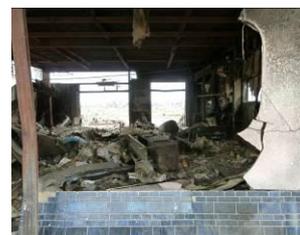
最終日の午後、避難者の方が身体の具合が悪くなり救急車を呼ぶ事態となりました。幸い入院というようなことにはなりませんでした。



日和山より



がんばろう!石巻



恐ろしい津波の被害

派遣を振り返って

私が派遣されたのは震災から5ヶ月が過ぎた時でした。5班ある避難者のリーダーがしっかりと避難者を統率しており、臨時職員の方たちも一生懸命取り組んでいました。しかし、避難所の運営は臨時職員だけでは大変なようでした。被災地での経験を踏まえるとやはり正規職員は必要だと感じました。また、正規職員は避難所に常勤か常駐の方が良いと思いました。防災士という資格があると聞いたので是非勉強してみたいと思いました。



総務部 市民自治推進課

課長補佐 村上 穰介

【派遣先】

石巻市立 蛇田中学校

食料等の搬入受入、配布の準備

避難所には1日に2回食料等（弁当、副菜、パン、おにぎり、飲料他）が搬入されてきます。（搬入業者も他府県からの応援でした。）搬入後は直ちに仕分け、保冷の措置をして保管します。そして時間になったら避難者とともに配布場所へ配置し、さらに在宅避難者への配布分を受付に用意します。飽きられてしまったのか、レトルト食品、缶詰等は比較的不人気だったのですが、仮設住宅入所が一斉に決まった途端、一転、不足する事態も発生しました。

物品等の配布、貸出・返却

避難所にストックしている物資を避難者からの求めに応じて随時配布するのも業務のひとつです。暑い時期だったので、アイスノンや保冷剤の貸し出しも行いました。8月の避難所はとても蒸し暑く、アイスノン無しではとても夜眠れず、また、食品等の保存のために保冷剤は必需品で、冷凍庫もフル稼働状態です。また、自転車も貸し出すもののひとつですが、私の避難所の自転車は名古屋市から贈られたリサイクルのものでした。「名チャリ」と呼ばれるこの自転車は、避難者やスタッフの貴重な足として、大活躍していました。



大活躍だった「名チャリ」

在庫物品の整理、管理

当初、物資の保管場所を見て、整然と積み上がっているように見えたが、実は同種のもが全く別の場所に保管されていたり、数量等が全く把握されていなかったり、在庫管理という点では厳しい状態でした。責任者がいないこと、スタッフが頻繁に交代してしまうことが大きな原因と考えられます。在庫把握に着手した形跡が引継ファイルの中に数件見られましたが、結局はうまく引き継がれずに終わってしまっていました。



山積みになっている物資

避難者からのクレームへの対応



中学校の裏には大型スーパーのイオン石巻店があります

物資の配布が公平でない、在庫物資を横流ししている、食事の配布が公平でない等々、様々なクレームを受けましたが、次第にその本質はクレーム自体の問題ではないのだとわかってきました。じっくり話を聴けば、根本においては大きな話ではないものばかりです。不十分な情報開示による誤解から端を発し、いろいろな憶測が上乘せされ、結果として不信感を醸成していく類のものが多いように感じました。

派遣を振り返って

肝要なことは「風通しの大切さ」でしょうか。要因は様々あるようですが、「市はまた何か隠しているから」「またすぐに方針が変わるから」といった、主に情報開示・情報共有が噛み合わないことに起因すると思われる市政に対する不信感（震災後のものに限りません）が、残念ながら避難者の間から非常に強く伝わってきました。このことから、日頃から情報共有を進め、説明責任をきちんと果たし、市民と行政とが同じ方向を向いて動き出せる風土を形成していくことが大切であると深く感じました。「被災者支援、復興」の前に、まず「不信感の排除」という大きな課題が立ちはだかることは、市民にとっても行政にとっても大変に不幸なことであると思います。



企画部 情報推進課

主事 武山 大輔

【派遣先】

石巻市 蛇田公民館

お風呂のある避難所



駐車場にテント式のお風呂が

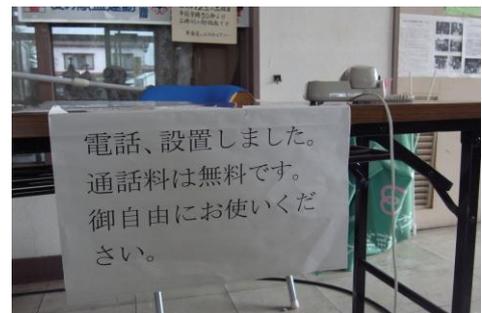
蛇田公民館は避難されている方が30人前後であり、比較的落ち着いた運営がなされていました。特筆すべきは公民館の駐車場に設置されたテント式の簡易風呂の存在で、その管理や清掃が主な仕事でした。近くには入浴施設がなく、銭湯への送迎バスも週に3回の運行であるため、避難所にとって大変重要な設備と言えます。また、他の避難所の支援員にとっても唯一の入浴施設であり、空きを見ては手早くシャワーを済ませていました。

冷蔵庫、洗濯機の設備も

乳児や介護が必要な方はいませんでしたが、人工透析等で定期的に病院に通っている方がいらっしゃいました。（病院から迎えの車が来ていました）館内は公民館職員、避難されている方、支援員それぞれの手で協力して清掃が行われており、常に清潔に保たれていました。入口付近にはNTTによる無料電話も設置され、避難されている方がよく利用していました。冷蔵庫や洗濯機については、共同での使用です。人数が少なく炊き出しは行いませんでしたが、以前避難されていた方が訪ねてきて、避難者にみそ汁を作っていただく場面もありました。



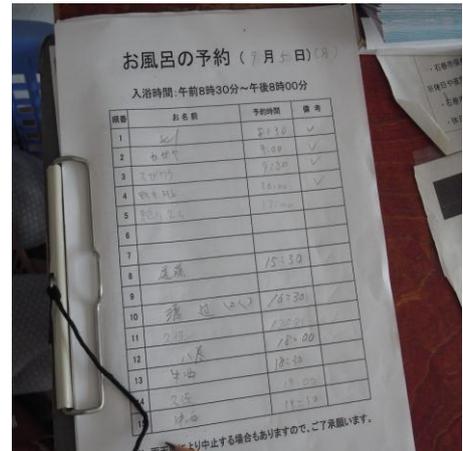
入口にある洗濯機



廊下に設置された無料電話

公民館としては機能できず

私が派遣された9月の時点においても、ホール、会議室、和室の各部屋に避難されている方がおり、図書室なども支援物資の保管場所となっていたため、公民館本来の機能は止まったままでした。「集会を行いたい」という市民の方からの問い合わせも多くありましたが、対応できないことを伝えるしかありませんでした。公民館の隣には仮設住宅があるため、引っ越してきたばかりの方から道を聞かれることもあり、公民館職員が不在の際は地図を見ながらご案内することもありました。



入浴順を決める予約表

子どものお弁当を作りたい



仮設住宅の方が施設周辺のことを尋ねにくることも

市内の小学校に避難されている方から、「明日子どもの遠足があり、お弁当を作りたいので調理場所を貸してほしい」という願いがありました。避難所（小学校体育館）にはガス等の設備がないため、公民館の給湯室を使いたいのことでした。早朝6時に自転車で1時間ほどかけて来館され、手早く調理してお帰りになれました。

派遣を振り返って

着任初日には配布したお弁当の回収騒動があったものの、それ以降は特に大きな問題もなく支援を行うことができました。私が派遣された時期が9月であったこともあり、支援物資が大量に余り、施設を圧迫していることが課題であると感じました。パックのレトルトカレーやインスタントラーメンでは炊き出しを行うことができず、また人数分ないと不平等になるため、必要な時期に配布できないまま在庫が蓄積されているのではと思いました。公民館職員と協力して仕分けを行い、やや多めに配布するなどして対応しました。物資の扱い、特に食品については決まった時期にまとめて配布するなどの決断が必要であると感じました。



都市部 都市計画課

主事 隅田 晃広

【派遣先】

石巻市立 蛇田小学校

ソフトボールを通じた交流



避難者の方と交換したTシャツ

蛇田小学校グラウンドでは、毎週日曜日に近所のソフトボールチームが活動をしていました。避難者と石巻市の臨時職員、神奈川県からの派遣職員で毎週その練習に参加しており、私も練習に参加させていただきました。そのソフトボールチームのメンバーも被災者の方々であり、家の倒壊などの被害にあった方もいらっしゃるようですが、みなでとても楽しそうにソフトボールの練習をしていました。また避難者の方々にも好評で、緊張した避難生活においては、重要な時間となっていたように感じました。



災害の影響色濃い石巻市街地の歩道

自転車での石巻視察

神奈川県職員の案内で派遣後すぐに現地を視察する機会があったのですが、私は後日、時間をいただいて自転車で現地を走ってみることにしました。現地視察では車で移動したため景色もすぐに通り過ぎてしまいましたが、自転車で街を走ってみると道路の状態や埃、流された家の跡地の状態など様々なものをより近くで感じることができました。

また、海沿いでは、ほとんどの家が流され、広大な空き地やがれきが散らばっている光景を目にしました。被災地を自転車で走り、現地の様子や雰囲気をより近くで確認できたことは、非常に心が痛むものでしたが、貴重な経験になりました。



運転を再開していた蛇田駅

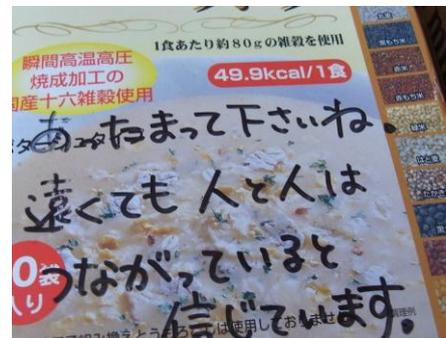


バスが建物に乗り上げたまま（女川町）

障害がある方への対応

避難所である蛇田小学校には、知的障害がある方がいました。他の避難者の方と同じように生活していますが、集団生活の中で周りの方と協調するのが難しい部分がありました。避難者の方々は、自分たちの生活もあり、精神的・肉体的にも通常の状態ではないことから知的障害がある方に対してもきつくあたってしまうこともあるようでした。

同時期に派遣された神奈川県職員の職員が養護教諭であったということもあり、その方と話をする中でも、行政としては、普通に生活していたり、特別支援学校に通っている障害がある方々については、災害時において他の健常者と完全に同じ扱いをするのではなく避難や安否確認の方法に関しても特別な仕組みが必要となるということを感じました。



届けられた物資の中にはこんな言葉も

派遣を振り返って

入庁してすぐに被災地派遣といった活動を経験できたことは非常に有意義なことでした。石巻市では、恐らく想定を超えた災害の被害にあったと思います。今回の経験を通して、私たち茅ヶ崎市は、最悪を想定したなかで防災や減災に取り組んでいく必要があります。そのためには、現地での経験は少なからず生かせる場面はあると考えます。災害時には、避難所の初期運営のルールもある程度構築していく必要があります。また、避難所の指定や避難者の受け入れ体制に関しても学校側との連携等、検討していかなくてはならない事項は多数にわたることが想定されます。これからは、私の経験を少しでも茅ヶ崎市で活かしていくことが務めであると思います。



経済部 拠点整備課

副主査 細部 尚文

【派遣先】

石巻市立 青葉中学校

避難所閉鎖間際の食事情

9月中旬、避難所は閉鎖を直前に控え、とても落ち着いた状態でした。避難所によって運営状況は異なっていましたが、当避難所では避難所本部（青葉中学校）のサポートのもと、自治組織が確立されており、体育館の床清掃はもちろん、トイレ掃除や食事の配給作業までも避難者自身によって行われていました。

食事の配給については避難所に避難されている被災者以外の方も対象となっており、ガスや水道といったライフラインの復旧が滞っている家庭への配給も行いました。

市街地ではすでにスーパーマーケットやコンビニエンスストアも営業を再開していました。そのため、配給を申請しても実際には食事を取りにこない家庭もあり、多くの食料が毎日余り、その処理に苦勞する一面もありました。

被災後半年が経ち、今後は物資による支援ではなく、住環境や職場の確保といった生活支援に援助が必要であると感じました。



みなで協力して行われる配給作業



2食分：夕食のお弁当と翌朝分のおにぎり、副食

被災地の避難所を台風15号が襲う！

9月21日夜、台風15号が石巻市に最接近しました。石巻市は震災による地盤沈下の影響もあり、市内各地で道路が冠水し、一部では土砂崩れが発生しました。市街地は床上・床下浸水のおそれがあることから、市内約1万7千人に避難勧告が発令されることとなりました。夜になり台風が近づくと連れ、強風・豪雨の中、当避難所にも台風による避難者が集まり始めました。避難所は新たな避難者と、漏電による停電といったトラブルも重なり、一時騒然となりました。しかし震災の経験からか、石巻市の避難者は夜中も決して騒ぐこと無く、お互いを気遣い過ごしているように感じました。おかげで、震災以来長期間避難所生活を続けている避難所住民ともトラブル無く一夜を過ごすことができました。

被災地へ届けられたたくさんのメッセージ

避難所の閉鎖が迫り、差し当たり今の自分にできることは、支援物資や食料が煩雑に押し込まれたままの備蓄庫の整理・片付けを行いました。

その中には残念ながらすでに賞味期限の切れた食料もありましたが、これまでの日本のODAによる支援を受けた発展途上国など、国外からの支援物資が驚くほど多く見受けられました。もちろん国内からの支援物資も多く、送られてきたダンボールの外側にはマジックで、「がんばって！」のメッセージが書かれていました。なかには小さな子どもが覚え立ての文字で一生懸命書いた励ましの手紙が入ったものもありました。多くの人の思いが被災者を支え、避難所が運営できることを身をもって知ることができました。



食料庫（家庭科調理室）に並べられた支援物資

派遣を振り返って 震災から半年経ち、各避難所の運営状況に差があることを考察すると、避難所においてはまずは「支援者と避難者は互いに協力し合う関係である」という認識と意識づくりが重要であると感じました。被災者が受身である事を止め、「動ける者は動く」、「やれることは自分たちで」という意識をもってもらうことが、避難所運営上、非常に有効だと思います。

ひとたび震災が起これば、どのような状況になるかは分かりません。市の職員だけではどうにもならないことがほとんどだと思います。自分にできること、互いに協力し合い、みんなの為に行動することが大切だと思います。



企画部 情報推進課

主事 行川 充

【派遣先】

石巻市 蛇田公民館

被災から6ヶ月の避難所生活



大通りから少し入ったところにあります

公民館での主な業務は物資の搬入・仕分け・配給、風呂準備、施設清掃でした。お風呂は野外のテント内にあり、朝から晩までいつでも入れるように清掃とボイラーの準備等を行い、食事も毎日物資の搬入があり、食事に困ることはなく、施設周辺での買い物も可能でした。派遣される前は避難者の方の役に立ちたいという気持ちが強く、何を話せば良いかと考えていたのですが、実際は避難者の方との話はなるべく少ない方が良いというアドバイスを受けました。避難者の方からしてみれば、プライベートな空間は集団生活している避難所しかなく、そこに週代わりに新しい人が来て同じような質問をされるのは、確かに気分の良いものではありません。トイレ掃除や各個人のスペースなどは、避難者の方が交代で掃除をしており、荷物の運搬で人手が必要な際は声を掛け、お手伝いできる範囲で生活の邪魔をしないように心掛けていました。



避難者の方が生活している大ホール



お風呂は大切なリフレッシュ空間です

震災による被害の大きさ

公民館の自転車を借り、被害の大きかった旧北上川や市役所周辺を視察に行かせて頂きました。発災から6ヶ月が過ぎ、がれきは片付けられていましたが、建物の半壊もしくは全壊もあちこちに見られ、旧北上川の中洲は野原と化していました。被害の大きい地域へ行けば行くほど、道路は歪み、建物の基礎が傾き、背の丈辺りまで水が流れた痕跡が残っていて、目の前の光景に実感が湧くまで時間が掛かりました。海岸近くには多くのがれきが集積され、とても大きな山ができており、復興までにはまだまだ多くの人の時間と労力が必要だと思い、改めて支援やボランティアの必要性を実感しました。



現在休館中の石巻美術館



がんばっぺ石巻！

蛇田小学校での大道芸



入学後、初めて体育館に入りました



大道芸を見る児童たち

公民館の近所にある蛇田小学校の避難所へ伺った際、学校行事として大道芸人によるショーが催されていました。ショーは避難所である体育館で行われており、小学1年生から6年生と、一部の避難者の方が観賞されていました。児童の人数を分けるため二部構成で開催されており、避難者の中には、何時まで大道芸が行われるのかと苦情をおっしゃる方もいました。避難所での生活の不便さを感じた体験であるとともに、避難所に指定されているため、平成23年4月に入学した1年生にとって、この日が初めて体育館を使用できた1日だったと聞き、そこにいる全員が被災による影響を未だに多く受けていると感じました。

派遣を振り返って

第26陣は避難所閉鎖が迫っていたため、避難所への職員派遣の最後でしたが、未だに避難所生活を送っている方々もありました。そんな避難者の方々から、毎日お風呂や食事ができるのは、支援者のおかげだという言葉いただきました。現地職員の方からも、被災直後は公民館職員が交代で寝泊りし、避難所の維持・管理を行っていたため、心労や体調不良が続いたそうですが、支援者が寝泊りし、業務を行うことで、現地職員の健康維持・回復にとっても役立っていると伺い、嬉しく思いました。被害の大きかった地域では、復興にはまだまだ人手と時間が多く必要だと感じましたが、現地の方々は強く前向きにお話されている方が多くいた事に感銘を受けました。

